

## 家康お手植えの「ほうの木」

### 家康と無算和尚

清光寺二代目住職の峰誉（ほうよ）無算和尚は、かつて三河国（今の愛知県）の大樹寺で九世鎮誉の弟子をしていました。

そのときに、地のお殿さまであった徳川広忠（家康の父）のお召しを受け、たびたびお話相手になっていました。

ところが、広忠公は、不慮の死を遂げられたので、知遇を得ていた和尚は、その歯骨をいただき、拝請護持して関東のあちらこちらを回ったのち、この清光寺の住職になりました。そして、本堂の南に広忠公の歯骨を埋め、塚を造り、朝夕、香華（こうげ）をあげてご供養していました。

天正十九年（一五九一）、家康公が関東の領主となって、十一月に東金に鷹狩りに来られた時、広忠公の分骨を安置していることを知り、和尚をお召しになりました。

家康公は、和尚が広忠公のお墓をお守りしていることを聞くと、大変喜ばれ、翌日予定を変更して、すぐさま清光寺においでになり、お寺にお墓参りされたのです。

そして、お墓の印として厚朴（ほお）の木を植えられ、お寺に供養料として毎年五十石を寄付されたといわれています。

※ 厚朴は、高さが十五〜二十五メートルにもなるモクレ

ン科の高木です。香りの強い、大杉の花が咲きます。